

ヨコハマシジラガイ *Inversiunio jokohamensis* (Ihering)

【選定理由】

本種の属するイシガイ科貝類は、河川の下流域や平野部の用水路などの流れが緩やかで底質が砂泥で水質の良い場所を生息場所としている。県内ではこのような場所はほとんど破壊されてしまったため、1960年代には広い分布を持ち多産したイシガイ科貝類全体の生息が危機的状況である。その中でも本種は特に水質の良い場所を好み、本種が生息する場所では他のイシガイ科貝類も多く見られることが多い(木村, 1994; 木村・中西, 1997)。県内では1970年代に絶滅したと考えられ、絶滅と評価された。

【形態】

日本産イシガイ科貝類としては中型で、殻長は約7cm。殻長に比べて殻高がやや大きく、輪郭は長方形。殻長付近から殻の中央部にかけて逆V字型のさざなみ状の彫刻がある。主歯、後側歯ともに強い。マツカサガイ *Pronodularia japonensis* (Lea) と酷似しているため長らく混同されていたが、木村・中西(1997)で初めて三重県・岐阜県産本種のグロキディウム幼生や殻の形態が検討され、マツカサガイではなくオトコタテボシガイ属の1種として記録された。その後、Kondo(1998)の分類学的な再検討によってヨコハマシジラガイと種名が確定した。マツカサガイとは逆V字状の彫刻が弱く殻頂部では顆粒状になることから区別される。



豊橋市牛川町牟呂用水, 1960年代, 中山清採集

【分布の概要】

【県内の分布】

前述の通りマツカサガイと混同されていたため愛知県からの産出記録はない。豊橋市自然史博物館所蔵の高桑コレクションにマツカサガイと誤同定されたヨコハマシジラガイが存在する(豊橋市自然史博物館, 1994)。この標本は中山清氏によって1970年頃に豊川市の牟呂用水で採集された。これを最後に絶滅したと思われる。1998年からの現地調査でも再発見を試みたが、本種が生息する可能性のある場所さえ見つけることができなかった。

【国内の分布】

日本固有種。北海道から東海地方の河川下流域に分布する。湖沼には分布しないが、琵琶湖には近似種のオトコタテボシが分布する。また、琵琶湖東岸の小河川から九州北部にかけて近似種のニセマツカサガイが分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したように、河川の下流域や平野部の用水路などの流れが緩やかな砂泥底で水質の良い場所を生息場所としている。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように県内では絶滅したと評価された。

【特記事項】

上述のようにオトコタテボシガイ属には3種あるが、それぞれは貝殻やグロキディウム幼生の形態が極めて近似していて、それぞれが独立種なのか疑問が残る。それらの分類学的再検討が望まれる。岐阜県(2010)では絶滅危惧I類にランクされている。

【引用文献】

岐阜県, 2010. 岐阜県の絶滅のおそれのある野生動物 動物編 改訂版.

(https://www.pref.gifu.lg.jp/kurashi/kankyo/shizenhogo/c11265/index_17185.html)

木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報(第33報): 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一・中西尚史, 1997. 東海地方に分布するオトコタテボシ属の1種. ちりぼたん, 27(2): 41-48. 日本貝類学会.

Kondo, 1998. Revision of the Genus *Inversiunio* (Bivalvia: Unionidae), *Venus* 57(2): 85-94.

豊橋市自然史博物館, 1994. 高桑弘氏寄贈貝類目録 1二枚貝 Part2, 豊橋市自然史博物館資料集 第2号 31pp.

(木村昭一)